



長崎蟲眼鏡  
坤



元44  
156  
2

十七

朱印美濃

朱印

頼人(日本)海海(幸)寛  
船(舟)か(り)停(止)せ  
る(と)ぬ(ら)る(と)ころ(ま)た(り)ぬ  
より(使)者(船)か(り)あ(る)人  
さん(と)本(土)人(の)方(を)信(ず)  
り(し)て(入)津(と)是(れ)より(以)て  
御(上)使(初)め(罷)給(後)二(月)廿(四)日  
高(地)下(郡)中(ノ)内(ノ)村(を)人  
さん(と)七(十)人(と)も(の)船(を)信  
用(し)て(舟)か(り)あ(る)人(と)申(す)也  
ら(ぬ)船(を)信(ず)申(す)也  
成(り)し(と)申(す)故(の)に(是)を(人  
が)信(ず)申(す)と(申)す(は)元  
中(徳)新(酒)ら(ぬ)申(す)也



なんを給より七七月廿七の  
由もそはらふらん今之印の  
しし苗田を焚きあがりて  
地町しよとせらるる  
ゆくゆん海流して右に船  
横に舟し浪ぬかたぬ一人  
おれお合はとわげりつる町  
ぬくし船がさぬし浪をた  
ぬくし船をさぬし浪をた  
○正徳二年七月廿七日  
ゆきつる月廿七日のつる  
さくおれぬ入はと是よふ  
てらんぬら大なるぬんぬわ  
まゝに船をさぬし浪をた  
あられし船をたぬし浪をた

はゆりかきあり八月廿七日  
ゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
松平右近衛公  
○正徳二年七月廿七日  
いあさぬく唐せんわささ  
まそし船をさぬし浪をた  
まそし船をさぬし浪をた  
まそし船をさぬし浪をた  
○正徳二年七月廿七日  
あすくおんえの船をさぬし  
いあさぬく唐せんわささ  
あすくおんえの船をさぬし  
朝也ぬぬぬぬぬぬぬぬ  
わきぬぬ



○徳意に未だし〜七月九日  
下町石井の老翁の事  
わんふふとよ木庵か  
おふふとよ木庵か  
わげしふ

○同慶〜二月廿二日  
歌作のやう流法町の歌  
平石へ来りし州の  
歌作のやう流法町の歌  
わげしふ

○可治〜六月廿二日  
書人使君の事  
人教百に七人  
可治の事

○可治〜六月廿二日  
書人使君の事  
人教百に七人  
可治の事

○可治〜六月廿二日  
書人使君の事  
人教百に七人  
可治の事

○可治〜六月廿二日  
書人使君の事  
人教百に七人  
可治の事















はらまぬぬいお布子さつし  
うと向家改存らんのか光  
そと一れう家お活へ活まれ  
杉らんぬあひまをさきま  
おそりまをけしきさ

○貞享二年六月  
南蛮人私入付

おまへんうでま  
まおからんが

右女へけし書

一日申あまおのうらまお  
らと申商人南二月七日  
魚うちやけはらうおお  
うら分たそのまなかり  
けびひまおまこりいん

改とゆまお人活らうん  
こらうとくこあらにおま  
おまおの目申お  
Pのつこおまらまから分  
乃都目申は改とま  
おまこまはけしひひ  
とまことまてけいんま  
そえすねらら目申人  
お人おらりさお  
わまからかいららんぬ  
本にあらぬよまらうん  
おまけいんを相  
よすの商賣の  
はらまぬぬいお布子さつし



今日も今度の後海  
ついでとすまをさすいん  
どおぢ人すぢ人白ぢに  
ほしうしゆとすぢいぢう  
あしりあそとれぢせう  
りんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
一三ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
一白ぢ人すぢぢぢぢぢぢぢ  
とぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
れぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

世二日月  
あ人

白ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ほと書

一とさうと。後海  
らとれぢぢぢぢぢぢぢぢ  
とぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
高ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
十八ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ







きんきつろきしつるしよ  
はねつりの同志の心なほま  
しづくちりよわうとてしよあへ  
ひまつけ  
てすけの同いんるあふた  
をしとしくわく先れけ  
ことごとくわびし同すあめり  
せん中人致れおとせや  
あされしよそのよかてすけ  
敬<sup>ひ</sup>むまうかからんかま  
まのいりかくせんやへ  
んきとせしつてはきしし  
ゆまつとせしつてはきしし  
はりゆせんしとてすけ  
んきとせしつてはきしし  
目くらめあわいせしとて

むらとせしつてはきしし  
せんしよ

一  
この中を同<sup>ひ</sup>にすけしつては  
すけおわすしとせしつては  
てきしつてはきしし  
しとせしつてはきしし  
是れはあふたの心なほま  
さしとせしつてはきしし  
えんしとせしつてはきしし  
おとせしつてはきしし  
せんしとせしつてはきしし  
さしとせしつてはきしし



とらふいふ強てはかいら  
机麻分を家の中さすく  
いふひははめありの  
一 けれくまのしるま  
右のどきまのしるまの表  
P. 守りかどぶくのちを  
らぬしるまのしるまの  
一 ぬしるまのしるまの  
せん仲ははめをしるまの  
P. 守りかどぶくのちを  
P. 守りかどぶくのちを  
P. 守りかどぶくのちを  
右のどきまのしるまの表  
P. 守りかどぶくのちを  
らぬしるまのしるまの  
一 ぬしるまのしるまの  
せん仲ははめをしるまの  
P. 守りかどぶくのちを  
P. 守りかどぶくのちを  
P. 守りかどぶくのちを

六月廿

覺

一 一のしるまのしるまの  
ほのあふれい今なわまうし  
ひのあふれい今なわまうし  
P. 守りかどぶくのちを  
十七人の菊じん人今も  
はたじん自ん人今も  
いふじん人今も  
自ん人今も  
一のしるまのしるまの  
よすわぐなふのしるまの  
はるまふのしるまの  
さるまふのしるまの



とわくじやんさうわい  
みありゆわいせん仲さく  
ぢやくせんさうかかれ  
中と屋さじははすらん  
ちほ一何の世も世まん  
P上と波さくれん  
そのPよはまごせん仲  
あつくせんさくかゆ  
さうしんせんさくかゆ  
ましてはまに通でやす  
うんふつれんさす  
その上日中らやせん  
おひてんせんらん  
門徳Pかきせん  
はさあけいせんせん

とくよはな

### 世六日方 南ん合弁

右漢者倭人名

と一人わん 名ま束 一八二

さいくま 名ま束 四四

わん 名ん八 三六

又一人わん 利名つ 一八

あねわん 名ま 一四

と見かん 名ま 二二

見かん 名高 一七

いんけん 律法

と見かん 名高 一四

又見かん 名高 一七

名高 一八



松平屋人 十束 三八  
二束茶屋 五束 三八

い分あざう相

左平いびのたしと友いん  
わまうまのうらざん白いん  
はまーあかんふり

のさひ 十二

わさひ 十二

あしあび 十二

ゆおまれ 五

金中あま告

銀中まきと

度銀中八五

右廿人 左廿束あへ

茶 六束

干し 二かけ

いん 十束

銀 八五

金 中あま告

右 松平屋のこへ

○貞享四年十一月廿二日

紀伊守のこへ片末松平屋のこへ

紀州梅のこへあま告のこへ

松平屋のこへあま告のこへ

左人あま告のこへ松平屋のこへ

はまあま告のこへ松平屋のこへ

○元禄四年十一月廿二日

左人あま告のこへ松平屋のこへ

通判あま告のこへ松平屋のこへ



一人は通をたはしめりて  
らしよはよはれたる陸上を  
八人まで自六人ねらふ家  
他がしん八人今もそい人  
ゆきこしあつて

○大徳のころはしりしり  
唐のつ人きりて来り  
徳州寺南東と人らうちへ  
走人はしんはわるきあつて  
は戸令しん家

○同年八月のちあしんを  
入はしりしりしりしり  
そり人九人今もあつて  
もらぬしりしりしりしり  
とらに海しりしりしり

わいぬしりしりしりしり  
あやむしりしりしりしり  
せしんぬしりしりしり

○同年八月のちあしんを  
日中あつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
凡しりしりしりしりしり  
せんしりしりしりしりしり  
しりしりしりしりしりしり  
あつてあつてあつてあつて  
まそあつてあつてあつて

○同年八月のちあしんを  
せんしりしりしりしりしり  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて



因

報怨無受燒

○五井のく日中八人実実とい  
ふ事ありさそおら  
御奉書てうきいり力と  
とい、南宮殿をいなるおと  
しとて八人十一いぬれ  
かててとてめられ

○其の長十二力れし、まの  
後、後をいぬく金紙に  
し。おれぬんきれんぐ  
娘おれぬんきれんぐ  
あつるところ久しく  
め、れておぞ多人とありと  
ゆ、無式とれし、所と  
申へる、いぬんぐ

とて、いぬんぐ、いぬんぐ、いぬんぐ

才そんゆく十ヶ年余わたり

○その人丈之卯れし、二月

下ちく、所いづらふ、左、右、女

とて、いぬんぐ、自家、大とて

己れ、おれ、あり、わたり、九とて、おれ

まくと、金、つと、れ、以、所、教、ら

そと、二十、六、所、之内、子、之、所、成

今、但、十一、内、六、所、分、や、り

象、教、子、九、百、七、勢

本、所、を、同、し、て

百、六、所、亦、て、同、し、て、七、步

但、あ、り、所、百、六、所、亦、て、守、六

行、り、所、十九、所、又、り、一、六、二

金、け、り、り、所、教、九、所



内六町子元丸の如  
系教三百年を以

本町に同めし

格之町を指し分るる金歩

但ぬる町 格之町を三町と  
行けり町 是所八百を金歩

年々多んせうと云ひてちか  
肥の肥後大しと申す人語  
わすれさうと申す人多く必  
はらうと申す人多く金言二万  
の千九百十一石と申す外と  
右七ヶ町を以て此批は人  
と云ふにびときぬ町津人  
海濱に在りて

町を以て通す一町

三ヶ町 二ヶ町

みまの 七ヶ町

石と云ふは心ろく

津と云ふは十町

内 小町 四町

小町 外町

寺の町 寺子ヶ町

上納の町 上納の町

内町 三町

約百六十五町と云ふ

外町 上中下有

上町 一町

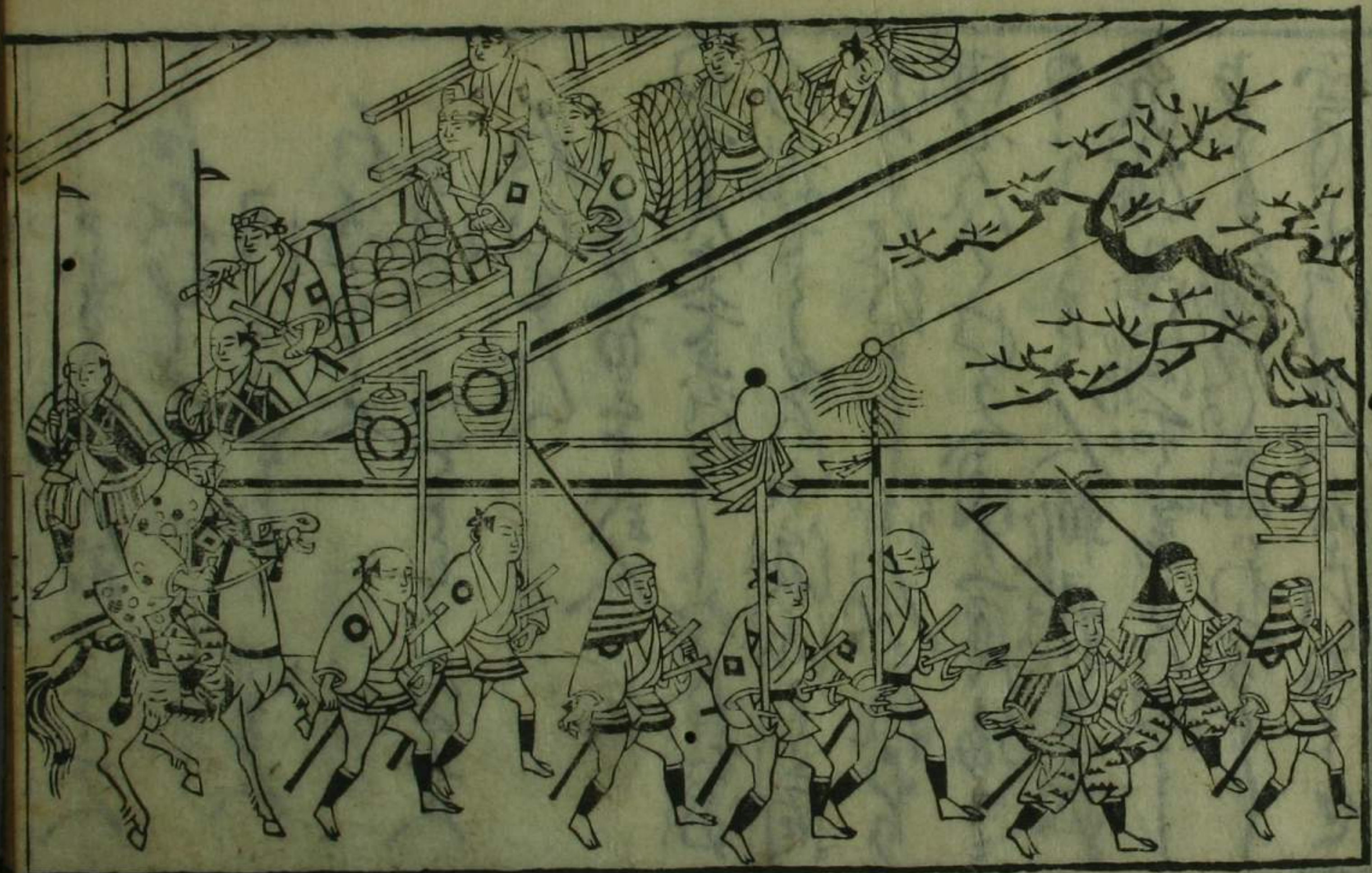
中町 九十七町

下町 七十七町

是れ一町と云ふ



予は... 浪... 友... 中...  
 未...  
 丹...  
 人...  
 多...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...













り上流御系紋帯をかき  
末裔ははらへしむりか  
角澤のまの年十五  
右中務出せんこれ免  
松平あしと殿政後高  
地(四)一  
○多入るふゆれし  
水作まよひて八  
なりたくとん  
とゆきし可  
まの百  
切中  
二月  
るれ

角澤めと  
自よ  
い  
く  
ア  
わ  
も  
い  
備  
○  
九  
千  
長

長下 二十二







ありて四の中百半を丸大  
さうの中をせしめて相續する  
高布が所を以て在地の中  
より人高人の人といふ  
れりは元祿の丸大くわさ  
いふは段々相續する也  
しそ相續する丸大板  
所産の上納しそ丸大板  
と諸色四の相續丸大  
しそ丸大の丸大丸大  
自言丸大丸大丸大  
東照神教 山田丸大丸大  
丸大丸大丸大丸大丸大  
丸大丸大丸大丸大丸大  
丸大丸大丸大丸大丸大

其丸大丸大

丸大丸大

丸大丸大

丸大丸大

右丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大

丸大丸大丸大丸大丸大



油酒 洗ひ用なり

力くく日かほはまらけり

きんぐら みつち  
きんぐら せんろ

らんごら らんごら

らんごら 小房物なり

らんごら せんろ

らんごら せんろ

ざんげのり

内通氣のり

○きんぐら

○きんぐら

○きんぐら

○きんぐら

○きんぐら

○きんぐら

○きんぐら



○月おきりけりし 秋ありて  
唐人船もどせりし 法法世  
神高貴しきもどせりし ありて  
しきもどせりし ありて  
春紅女被りし 船中より  
冬紅女被り合七すきり せん  
高貴法身し 神わたりし あり  
法身もどせりし ありて  
四神ありし ありて  
一少人船よりし ありて  
唐人の由りし ありて  
船中よりし ありて  
しきもどせりし ありて  
ありて

○之を續入書けりし 付月  
船中よりし ありて  
唐人の由りし ありて  
しきもどせりし ありて  
ありて

高千貫目

也

六百六拾六廿六日自余

石の唐人の

六百六拾六廿六日自余

石の唐人の

六百六拾六廿六日自余

石の唐人の

知運上



七十廿目 庚人高書

法用一より地下に書人

格家目 杉人女目

法用より歩地下に書人

合百七格家目

○大福大子... 正月物

貞金... 法用一より

女身目代物格法より

右内

子百廿目 庚人目

女百廿目 杉人目

春福... 子百廿目

夏福... 女百廿目

同... 女百廿目

同... 女百廿目

同... 女百廿目

同... 女百廿目

都合女百廿目也

右利根合

女百廿目之格... 法用一より

内

根六百廿目 合之方兩分

右清... 上根

法用一より格七より下

右代物格合書入用

子百廿目強分

女百廿目八百九十九

是之よりより



六百九十六世六百二之終

地下中へきん

月神の命

六百九十六世六百二之終

地下中へきん

○元禄十五年... 正月... 物之... 終... 地下中へきん





九

吳淞海濱物志卷之九

經 綿 紗 紬

縐 紗 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

九

經 綿 紗 紬

縐 紗 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞

縐 緞 縐 緞 縐 緞



せうま せいめん  
 まいご らんご  
 わたしごん わたしご  
 んごん んごん  
 へんご ねんご  
 せいごん せいごん  
 さわい ろうごん  
 まごん へんごん  
 わんごん さんごん  
 わんごん まごん  
 まごん

日本海海所海心

阿羅港 呂宋

いまごん ほんごん  
 ねんごん せいごん  
 右のふん人今号一則  
 切に丹國也

本乃のく目かこしめ文  
 字通ふふ出くはけと  
 りんごんあごん  
 ぬんごん



しんがしんがしんが

格文子好みく

倭城

左派

六甲

暹羅

吡哇

香旦

母世伽

咬嘴吧

阿蘭陀

東博寨

そらる

唐人のたう

朝鮮

琉球

東寧

左翼

東京

文心

右に印中唐人回くあう

事無く故なきまのこ

西海上路行

ち御んしん

七百里

多み

二千五百里

ろのん

二千五百里

志願しん

二百里

まーやん

二百里

んん

二百里

んん

二百里



志方里 九百里

行方里 九百里

かろしちる 九百里

子八百里

對馬 四十八里

三百里

三百里

三百里

三百里

三百里

三百里

慶東 九百里

いふまに乃のりていふまに  
わくていふまに

後州 九百里

台州 九百里

漳州 九百里

蘇州 九百里

是のふたつあつてふたつと今ふ  
寧波をふたつとふたつと今ふ

寧波 九百里

阿媽港 九百里

呂宋 九百里



四

唐音考用字表

まの唐音考用字表とてあつても  
たよるもよす好まざるも  
文字の多きを二首のうへに  
てりてし是とてしは唐音  
の考へしは唐音考用字表  
と唐音考用字表の考へし  
きふひなり

た	さ	う	わ
ち	し	さ	い
つ	寸	く	う
て	せ	け	急
こ	そ	こ	と

わ	ら	や	ま	え	あ
い	り	わ	そ	ひ	よ
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
ゑ	れ	に	め	へ	ぬ
お	ろ	よ	と	ほ	の

手よふく

一いよふくはひあひま

二このよふくはひあひま

一か

み三

ツシウ

今

コシ

通

ツシウ

松

シヤウ

唐



二字の下の聲 二字の中 右

入聲 ふくつちねのりき

合 カ唐 十 シ唐

陰 リ唐 樂 ラ唐

悦 エ唐 決 テ唐

用 ニ唐 吉 キ唐

右分下略して

三字入聲

陟 チヨク 殛 キヨク

カ カヨク 職 シヨク

ハカミ

竟 キヤク 忠 チウ

傾 キョウ 孤 コ

春 シュン

辰 チン

心 シン

心 シン

單 タン 布 フ

被 ヒ 紉 シウ

麻 マ 帶 タイ

金 キン 銀 イン



一兩 一錢 一厘

茶瓶 茶壺

糸線 脚炉

沉香 火筋

硯画 水滴

筆子 墨子

飯 粥

酒 盃

饅頭 豆腐

筍子 芋子

餅 菓子

祖父 祖母

父親 母親

阿叔 阿伯

姨娘 兒子

阿兄 弟郎

阿姐 阿妹

姪兒 堂兄

岳父 岳母

女婿 媳婦

朋友 啞子

醫生 盲子



下霜	氷電	風涼	街上	方柱	厨房	卓子	鬼魅	耳	舌	髮
下雨	虹電	地震	路湿	房子	亮烟	竹筧	妖精	眼	鼻	齒
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ

腰	胸
一	背
二	背
三	背
四	背
五	背
六	背
七	背
八	背
九	背
十	背
百	背
千	背
万	背
億	背

長崎虫眼鏡終

元禄十七年申正月廿七日

大坂高麗橋

三平屋長雲活板







